

「国語の力」の成立過程

XV

— 国語教育学說史研究 —

野 地 潤 家

一六

「国語の力」(大正11年5月8日、不老閣書房刊)が刊行されて、もっともはやい時期に紹介されたのは、垣内松三先生の高弟斎藤清衛教授であった。斎藤清衛教授は、当時広島高等師範学校に勤めていられた、附属小学校の機関誌「学校教育」(第九卷第七号、第一〇九号、大正一一年七月号)に、「新しい国語教授の方向へ——垣内氏著『国語の力』を紹介す——」という論稿を寄せられた。この紹介の論稿は、かなりの分量にのぼっているが、貴重な資料ゆえ、左に全文を採録させていただく。

如何なる物象、如何なる心象も尽く、寸時の絶間なく動き流れ、そして変移する。然るに流動せる対象を、静止の相において観て、そこに終止したのが、新研究法の出る迄の学者の態度であつた。

我々は、動相はどこ迄も動くといふ点を度外視して考へられないと思ふ。最近における哲学や芸術研究の著しい革新、否科学上の研究の進歩において迄も、此の態度に主として負つてゐると言つてよい。

然るに歴史的背景を持つてゐる科目の研究には、その性質上今なほ意気地なく古い態度を墨守してゐる物が多い。国語(広義)の研究の如きその顕著な一例である。これは列国に通じた共通の傾向であるかの様見うけられるがわが国の如き殊に甚しいやうである。これには勿論様々の理由もたつ。併し維新後五十有余年で次の様な事情であることを、國民はもつと意識すべきだと思ふ。

一、国語研究の志望者の尠少で、その質の低下の傾向のあること——国語研究に対する真摯の希望者の少ないことは、多くの大学に英文科の存置を見ても国文科の設けのない事、「国語教育」の外、国語研究の専門雑誌が一種も刊行されてゐない事実等で分る。又、兩帝大を合せて毎年出す国語研究者は僅かに十名前後を出でないのである。全く首尾転倒の状態である。従て、その質の低下の傾向は説明する迄もない。本年度(引用者注、大正一一年度)の広島高師一部入学者の試験成績は英語科が最優等であつた。

二、次に敢て、国語教授者自らが、ともすれば国語科を軽視して教授法の研究もこれを粗漏にするといふ点に論じ及ぶたい。却て小学校においては幾分でも国語教授法の進歩があつた。弊は中等学

校、高等学校に最も多い。地理科や物理科の教授内容は、時と共に
変移するが、国語はさうでないと思つてゐるのかも知れない。以て
の外の誤解である。時にとつて保守も大切であるが、動き移つてゐ
るものに対しては大胆な態度に出る所に進歩がある。日常の言語の
変移、生徒の知識の進歩、時代の推移、これらをも思ふと十年前中学
一年生に対する教授法がそのまゝ、現在の同年生に適用し得る筈がな
い。これも結局、国語を愛する情の不足に由来する、かく自分は断
定したのである。

三、次に、又、社会一般生徒自身迄国語の授業を軽蔑する傾向の
ある事である。高等学校においてはそれが最も著しいと思ふが中学
校にあつても珍とせない。又社会の中にも、「常用文字が二千字に
制限されたり、文語文が廃されたりすると、国語の教師は教授する
事が無くなりはせぬか」といふ如き愚問を發するものがある。国語
の教授は一刻も早く、訓詁解^{くわ}積^{せき}のみが国語教授の職能であるといふ
迷夢から醒めなければならぬ。自分は、現代の思潮を理解し生徒
の思想を指導する責任の半ばは、国語教授者の負ふべきものだと思
ずる。特に、現代文学を理解せず相当の創作力を持たないものは国
語教授者の資格がないのだと認める。生徒の精神生活を理解すべ
き筈の国語教授者が、現代語を理解せず現代思潮と没交渉に立つて
ゐるとは何たる矛盾だらう。自分は、ある宗教的文学作品をよんで
煩悶してゐた一中学生を知つてゐる。さうして国語の教師はそれに
對して一語の助言もなし得なかつた。自分は、屢^{しばしば}、中学生が教師の
理解力や創作力を見積つてゐる事も、理由のあることと思ふ。小学校
においても童謡が作られるやうになつたことは喜びにたへない。中
学校においても、もつと詩や和歌が作られてよいと思ふ。しかし一

面、かゝる作品に對し、十分の自信を以て批判しうる者が国語教授
者中何人あるかといふ事を考へる時甚だ寒心にたへない。口語文の
作法においては、生徒の方が教師より優つてゐる者さへあるといふ
奇現象を呈してゐる。此れを要するに国語科が蔑視されるに至つた
ことは、教授者自身の怠慢がその職能を狭めたためではあるまい
か。彼等は国語の外形のみを固守して国語教授者だと稱してゐた。
思潮の流れと共に国語教授の對象の推移する事を氣付かなかつたの
は、恰も鎧姿で現代の戦場に立つ様なものである。難解^{なんげつ}枯^く屈^{くつ}の古語
熟語で飾りたてた平凡の内容の文を名文と考へる程、現代人は形の
權威を盲信してはいない。

この際にあつて、自分は、垣内氏の新著「国語の力」を獲たこ
とをこの上ない喜びとする。垣内氏は、沈滞萎靡した国語研究界に
永く真摯な努力を続けて來られた方で、自分の秘かに敬慕してゐる
篤学者である。今氏の新著を紹介しようとして思はず前書が長くな
つたが、この新著はかく迷路にある国語界に對する反抗の宣言書で
あるといつてよい。それは、悉く氏の編纂になる筈の国文学習叢書
の第一巻である。十二巻で完結すべきの叢書の予告を見るに、在
來の研究法に懐かない氏が、新しい立脚地において旧來の作品に新
体系を賦与しようとしてゐる事が分る、本書はこの総論とも見るべ
きもので、「解釈の力」——「文の形」——「言語の活力」——「
文の律動」——「国文学の体系」の五章から出來てゐる（「国語教
授と国語教育」といふ附録は長野師範においての氏の講演の筆記だ
さうである）氏の文章は幾分譚調をおびてや、晦澁な点がないで
もない、又、氏の博識が災して内容にも多少煩瑣な点も見える。し
かも読者をして首肯せしめずにはおかない文のもつ強みに對しては

敬服してやまない所である。次に、主として前四章を概括的にごく簡単に紹介して見たいと思ふ。

今、国語教授の階段を調べて見るに、凡そ読方（小学校）解釈（中学校、高等学校）批評（それ以上の学校）の三段にこれを分けしる事が出来る。しかも、この三段は本質的には同一なものである。しかるに、それを別々の作業の如く考へる点に国語教授の根本的誤謬が存する。これは、第一章「解釈の力」の要旨である。今、中等学校における教授方法を観るに、読方と批評といふ事は殆んど顧慮されてゐない。余り小さく区劃された語釈のみ事としてゐる。全文を見通す習練がない。従て大意を捕捉するの能力に乏しい。作者の表現しようとした想を直に会得し得ない。そこで眞の読方と正しい批評は、到底望み難い事になるのである。なる程、語釈、文法的解釈、修辭的解釈、韻律的解釈と進む在来の方法は一見秩序的に見えるけれど、畢竟それは、死体を解剖して以て生命力の根源を究めようとするものに外ならぬ。一語々々の解釈を連結しても、それは決して全義とはならない。人の精神を洞察するにその衣裳のみで出来ない様に、この場合にも我々は我々の直観力に俟たなければならぬ。解釈における直観力も神秘的のものと思つてはいけない。昔の儒学者が儒書に対する場合の直観力には駭くべきものがある。彼の等々の尽くは決して訓点のみ止まつては居なかつた。直観は実に、透徹した読方から誘導せられ、批評作用に依て完成されるのである。

由來、日本人はこの批評精神にかけてゐる。特に現代の国語教授は殆んど批評を度外視してゐる。読方は所詮自己を読むものでなければならぬ。我々は書籍雜誌に依て自己を読み、以て自己を向上

せしめ得る。こゝに厳正な批判力が生じて文化は發達してゆくものである。十歳の児童、廿歳の青年、それら自我を有し、自我のある所批評力が存する。しかし、自我を把握し、正しい批評精神を獲るには修養の如何に依て雲泥の差別の生ずることを知らなければならぬ。米國において十六歳の學生に日本の人口問題を論ずる作文を課してゐる如き、我々にとつては殆んど不可解に属する。これは無く、わが國語の性質、及び形式に捉はれ語釈に墮した現教授法の生んだ弊だといつて差支ない。日本人は、寸時も早く無駄な負担を去るやう努めなければならぬ。さうして、教室の読書に際しても、「かう読み」「かう思ひ」「かう感ずる」といふ点迄進んでゆきたいものである。自己のない根のない読書によつて、どんなに現代人は時間を徒費してゐるか分らない。

正しい批評力は同時に、創作力であるといふ事が出来る。思想界の混沌としてゐる現時、創作界の振興はこれを到底期待する事が出来ない。現代わが國の文化意識の不鮮明はすべてこの点に由來する。萎靡せる国語教授界の救はれる道は、批評精神を興さしめ、併せて潑瀾たる創作慾を起さしめる一事に存する。然らざれば生徒の心は、涸渇した教室国語科を去つて、尽く新聞雜誌等に吸収されてしまふにちがひない。（それには、常識教科書の体裁を呈してゐる教科書編輯者の罪もある。）同時に教授者も自らを練磨しなければ駄目である。生徒の試作する現代文、詩歌に対して確信ある批判が出来なくて眞の國語の發達は期すべくもない。自分は、飽く迄、著者の批評主義的解釋論に同感するものである。

かゝる見地からする時、文の外形は決して旧套の如き取扱ひにて満足さるべきではない。形は質の滲透にある。著者はこの立脚点か

ら、形を「文」（第二章）「言語」（第三章）「律動」（第四章）の三部門に分けて、更にこれを細説してゐる。さて第二章に述べられた要点は、いかにして文の形象を通して作者の意識を鑿むべきかといふ事にある。既述の如く、文は語彙の粗木細工ではない。摂理に基いて統一された一個の有機体的のものである。読者は、先づ最初にこの摂理を感得し、文中に流動せる意識の方向を觀取して仕舞はなければならぬ。こゝにおいて文の形象は想の形といふ事になる。文の印象に基いてこれを胸に再構成してみた形である。その形を把東し胸に収めてしまふ所に解釈の秘機がある。

然らばその方法は何か。かつては、三段法とか起承転結式の支那流の修辭法を適用して、事足れりとした。これが、語の生命力を直觀し得ない愚策であること今更説明を要しない。読者は、第一に作者の心を見すかさなければいけない。意識の糸素の融合点を捉へなければいけない。（著者はこの間の消息を、巧妙な例を以て証してゐるからそれを参照されたい）かく焦点を見極めた上から次にプロットに進め。それは、丸で在來の方法の逆転である。（もつともその作用は、概念的説明を許さない程機微に届して居るが、一度直觀し、体験を獲たものにとつては極めて条理的なものになると思ふ。）プロットは、いふ迄もなく作者が自然人生を觀た所のもの、形に滲透された様々の表現である。文はこれを外形の上から、抒情詩、叙事詩、評論、戯曲といふ様に分つことも出来よう。又、古典的、浪漫的、自然的、象徴的といふ様な分類も許されよう。しかし、最初からその分類が存してゐたといふ如き迷誤はこの際全然すてなければならぬ。我々はこれ等の形を、様々な作者の意識の方向、一傾向であるとのみ見る時、どんなに生々とした自由な觀賞

を得るであらう。

これ等の言葉に依つて、全然瑣末な語の価値はこれを見すてたものと速断してはいけない。自分は、第三章の「言語の活力」の項を讀むに至つて、著者がいかに、語感に対し綿密な考察を費してゐるかを知るのである。語感といふ表現は、在來の語積と區別する上誠に佳い言葉である。語感論は、文を構成する一語々々の在來の解釈の改竄である。在來の觀察が外辭に止まつてゐたとすれば新しい態度は内辭を感じようとするものである。従て、これ迄蛇足の如く解釈せられた古典中の語中に、却て重要な意義を發見される場合が少くない。（多数の实例を掲げた本書を参考せられたい）言語のもつ感じは、決して辭書に列記された換言法で言ひ尽されるやうな、簡單なものではないのである。外辭的解釈に終止してゐる人々は、辭書で満足する人である。乃至、文法的修辭的解釈に捕はれた人である。名文を検するに及んで、「あれ」「これ」といふ様な簡単な代名詞でさへも、いかに微妙な働きを持つてゐるかに駭かされるのである。これは尽く語と語との有機的關係に基いてゐる。故に、想形を直觀することを前提として始めて考へ得られる点である。作意といふ点のあまり顧慮されなかつた過去の解釈法に、語感の注目されなかつたといふ事も止むを得ない事であらう。

著者は、本章の間にローゼット辭典の紹介並に批判を挟んでゐる。實にかくの如き同意語の微妙な差異を示す特殊辭典のわが國に存しない事は遺憾の至りである。因文學叢書の第十二巻として予告されてある垣内氏編纂の辭書の刊行の早からんことを待つものである。

第四章の「文の律動」においては、著者は一面文の形を一層深く

内視し、併せて形象に対する最後の断案を下してゐる。文、詩歌中の節奏の響は、文学の要素の中、最も肉面的な心の律動の示現である。更に、一文は長い一語であるとも考察されるのである。前章で語感を決して外辞文では会得されないと云つた。これには、音感といふ事も含んでゐるのである。文の読者は、文の律動を正しく聴取することに依つて、最後に文章を自らの所有にすることが出来るのである。著者はこの見地から、綴音、アクセント、節奏等の研究を述べてゐる。その中の和歌俳句の味ひ方も、大体首肯せられる。なほ、文化の律動の叙述に連絡して、合唱、抒情詩、民謡、童謡、口語詩等の細目の説明もあるけれども、その紹介を割愛する。

以上の紹介文は、あまり印象的にすぎて説明の不充分の個所が多かつたと思ふ。たゞ国語研究者に対して多少でもそれが反省の材料になつたら幸甚である。なほ最後に一言附加したい。わが文化の発展に對し、国語教授者の責任は、今後いよいよ重大ならんとしてゐる。国語教授者の目下の急務は、国語の教授法といふ如き法式的研究より、まづ第一に自己の識見学力をいやが上にも向上せしめることではあるまいか。(同上誌「学校教育」、九六一—二〇二)

四百字詰原稿用紙にして一五枚に及ぶ、新著「国語の力」の紹介で、「国語の力」の内容(第一章―第四章)の的確な要約がなされ、さらに当時の国語教授界にきびしい要望がなされていた。齋藤清衛教授の右の文章は、「国語の力」の本質・価値がとらえられ、さらに教授自身の国語教育のありかたについての見識が裏づけされてお

り、おのずと格調の高いものとなっている。

齋藤清衛教授は、新著「国語の力」を、「かく迷路にある国語界

に対する反抗の宣言書である」(同上誌、九八ペ)とされる。「国語の力」の性格をよく道破されたものといつてよい。

齋藤清衛教授は、「国語の力」の内容を周到かつ的確に要約された。「国語の力」の文章は、「幾分識訳調をおびてやゝ晦渋な点がないでもない、又、氏の博識が災して内容にも多少煩瑣な点も見え」(同上誌、九八ペ)て、要約しにくいのであるが、齋藤教授は、それをあざやかにこなしていられる。「国語の力」は刊行直後、はやくももっともよき理解者(さらには批判者)を得たことになる。

右の紹介の文章は、おしまいに、「わが文化の発展に對し、国語教授者の責任は、今後いよいよ重大ならんとしてゐる。国語教授者の目下の急務は、国語教授法といふ如き法式的の研究より、まづ第一に自己の識見学力をいやが上にも向上せしめることではあるまいか。」(同上誌、一〇二ペ)という附言をもって結ばれている。これはまた、「国語の力」をつらぬく根本の提言でもあつた。さて、右の文章中、つぎのような一節がある。

「著者は本章(引用者注、第三章)の間にローゼット辞典の紹介並に批判を挟んでゐる。実にかくの如き同意語の微妙な差異を示す特殊辞典のわが国に存しない事は遺憾の至りである。国文学習叢書の第十二巻として予告されてある垣内氏編纂の辞典の刊行の早からんことを待つものである。」(同上誌、一〇一ペ)

垣内松三先生は、「国語の力」第三章「言語の活力」において、「ローゼット辞典」について、かなりくわしく具体的に言及されている。すなわち、第三章所収二三節のうち、

一〇 ローゼットの辞典

一　ローゼントの分類

一二　ローゼットの言語分類表

一三　ローゼット式辞典の考察(一)

一四　ローゼット式辞典の考察(二)

一五　ローゼット式辞典の考察(三)

一六　同意語の識別

のように、およそ三分の一ほどを費して、「ローゼット辞典」の紹介ならびにその考察・批判などがなされているのである。

垣内松三先生は、言語の解釈における意味の誘導の問題に言及し、つぎのように述べられた。

「言語の解釈は実にゲナングが謂ったように、意味の『誘導』

Exegesis である。この用語の語源はギリシャ語の『導き出す』であるという。即ち言語の外面を模索することではなくして、文章の關係に於て、其の具有する活力を導き出すことである。ゲナングがこの立場から、言語の解釈に於ける三つの問題を導き出して、1語源

2同意語、3言語に、固着した、不明の、還元をば示したのは、至当な注意である。たとえば『心』というような重要な言語を、ころ／＼の約」という解釈によりて満足することができるであらうか。『心』

『魂』『意味』『思慮』『情』という相互に近い意味の区別をいかに明示することを得るか。『精神』『意識』『観念』『概念』等の

言語といかに連繫せしめなければならぬか。我々の有する言語解釈に際して、その理論に於てはその必要を感じて居るが、その実際に

於ては、それを研究して居らぬのである。言語の歴史的發達の理法は知って居るが、註釈辞書に示されて居る二三の解釈をあてはめて古い文新しい文の上に現われて居る同じ語は、同じ意味で解釈して

異しないのである。言語の中に明瞭に跡づけ得る文化的展開を無視して外来語・専門語・齷齪語・新語として取扱って居るのである。

こういう種々の問題を整理することがともかく言語の解釈に於て先ず注意すべき重要な問題であらう。唯いい添えたいことは、ゲナングの三つの研究はそれ／＼関聯した問題であつて、いろ／＼に分つことができるのではあるが、それを実際に遂行する時には一と三が一つに結びつけられて、ミュレーやブラッドレーの研究の如き言語の歴史的研究を生じ、二はその中に含むこともできるが、ローゼットの対照辞典の如き研究を構成することができる。」(有朋堂版「国語の力」、三言語の活力、八意味の誘導、一四二―一四四頁)

当時の国語解釈の実践において、もっとも脆弱であり、不十分であつた問題点を指摘し、その問題を明らかにしていくための一つの具体的な手がかりとして、「ローゼット辞典」がとりあげられ、その紹介・考察が進められていたのである。

垣内松三先生は、「ローゼット辞典」について、まず、「この辞典の編纂趣旨は、普通の辞典は単語の意味を説明するのみで、言語が与えられてからその意味を求むるのであるが、ローゼットのは、その正反對に意味が言語を求むる時に最もひたとあてはまる言語を求むるために『意味』を以て組織された辞典である。／＼それであるから作文の際に有用であることはいうまでもないことで、この目的に向つては、類語辞典・引用辞典・美辞佳句集等の編纂物のあることは何人も知ることであるが、こゝに特にローゼットの辞典の觀察から得たい暗示の一は、言語が思想交換のために意味を載せて搬ぶといふだけでなく、言語は思想を明晰にし、意味に翼を与えるものであるということである。言語は思想を定着せしめ、思惟を自由

ならしめ、思惟を複雑ならしむるに、欠くべからざる手段であるが故に、言語の理解によりて、詭弁や奇言や人気言語を整理することが、思想展開の一つの方法ともなり、文法と論理との錯雜した問題もこれに依りて弁別せられるのである。ローゼットはまずその立場から、言語分類法を考えたのである。「(有朋堂版「国語の力」、一四六—一四七ペ)と述べ、「ローゼット辞典」の採っている意味の上からの分類ならびに各言語の対照的性質の上からの分類が紹介されている。

○分類法の第一着眼点—意味上の分類

- 1 抽象的關係—存在、類似、量、順序、数、時間、力
 - 2 空間—運動、位置の変化を含む種々の關係
 - 3 物質的世界—固体、液体、熱、音響、光、それ等の現象、それより生ずる知覚
 - 4 知識及びその作用—知得、把執力、思想交換
 - 5 執意—選択、意向、統一、作用、反対、依拠、契約、資
産等
 - 6 感情及び道念—感情、情緒、情念、道德的宗教的感情
- 分類法の第二着眼点—各言語の対照的性質上の分類
- 1 同一—差異—対照
 - 2 始—中—終
 - 3 過去—現在—未來
 - 1 凸形—平坦—凹面
 - 2 希望—無関心—嫌惡

1 不充分—充分—過剩

(有朋堂版「国語の力」、一四七—一四九ペ)

右に掲げた分類について、垣内松三先生は、つぎのように説明を加えられた。

「辞典は前の分類に依りて言語を彙集し、後の対照に依りて二行三行に駢排されて居るのであるが、ローゼットもいうように、そのために別に解釈はないのであるのに、分類対照だけで、各語の間微妙なる差異、その固有の意味の分化、明白なる相違等がその上に明に顕われて居ることである。二三の例を挙げれば、『思想』は『思惟作用』と『思惟作用の所産』とを示し、『判断』は『決定作用』と『決定』を示し、『希望の光』『暗黒の蔭』『想像の飛翔』『機智の閃光』『情の暖かさ』『憤怒の沸騰』のような転用も見られるのである。」(有朋堂版「国語の力」、一四九ペ)

右の例のうち、「思想については、たとえば 477 THOUGHT
Exercise of the Intellect.——nouns I. thought, thinking,
 cogitation, cerebration, mentation, intellection, intellectualization, ratiocination, reasoning; 481 brainwork, headwork, mental labor, workings of the mind; heavy thinking, tall headwork [slang]; straight thinking; idea 478. (Roget's International Thesaurus Third Edition, 310ペ)

となっている。もっとも、これは新版「ローゼット辞典」によるものであるが。

このように、「ローゼット辞典」における語の配列ならびに意味の示し方を紹介したのち、垣内松三先生は、同辞典の総綱目を挙げられた。

第1部 Abstract Relation

1 Existence	1—8 (以下の数字は細目の数を示す)
2 Relation	9—24
3 Quality	25—57
4 Order	58—83
5 Number	84—105
6 Time	106—139
7 Chance	140—152
8 Causation	153—179

第2部 Space

1 Generality	180—191
2 Dimensions	192—239
3 Form	240—263
4 Motion	264—315

第3部 Matter

1 Generality	316—320
2 Inorganic	321—356
3 Organic	357—449

第4部 Intellect

1 Formation of ideas	450—514
2 Communication of ideas	515—599

第5部 Volition

1 Individual	600—736
2 Intersocial	737—819

第6部 Affection

1 Generality	820—826
2 Personal	827—887
3 Sympathetic	888—921
4 Moral	922—975
5 Religions	976—1000

(有朋堂版「国語の力」150—152頁)

これらに添えて、垣内松三先生は、つぎのように述べられた。

右の「分類の中に約七六、〇〇〇語を収めてある。この辞典の特色は、以上の如く普通辞典と趣を異にするものであって、普通辞典の解釈は解釈作用の第一終点に到達する参考となる性質を有し、

ローゼット式辞典の用い方からは、寧ろ解釈作用の第二終点に導くものであって、単にその組織が異なるのみでなく、全くその性質を異にするものといつてよい。」(有朋堂版「国語の力」、一五二頁)

(なお、「ローゼット辞典」第三版の一九六二年刊によれば、前掲の分類の中に、第三部 Physics、第五部 Sensation が新たにはいり、細目は一、〇四〇に及んでいる。)

さて、垣内松三先生は、「ローゼット式辞典」について、左のような三つの点をとりあげて考察された。

- 1 「ローゼット式辞典」における組織的な編纂法の問題
- 2 同意語相互間の関係の究明の問題
- 3 「ローゼット式辞典」の他の国語への適用ならびにその効用の問題

これらのうち、まず、1の問題については、「ローゼット辞典」編纂改訂の由来について、つぎのように述べられた。

『セザウラス』は、ローゼット氏（引用者注、Peter Mark Roget, 1779—1869）の五十年間も没頭した労作であつて、一八〇五年には、既に現在の組織を見るに至つたのであるが、爾来一八五二年に至りて刊行せらるゝまで改削に苦心し、其後も尚お晩年に至るまで修正を加えて完成を期したのであつた。一八五五年に第三版が刊行せられてからは、同じ形で続々刊行せられた。今こゝに手にして居るのは一八七九年版であるが、それに載せてあるジョン・ローゼット（引用者注、Dr. John Lewis Roget, P. M. Roget の息子にあたる。彼が辞典の改訂にあつたのである。）の序文に依れば、研究的よりは実用的な辞典とするように注意を加えたことが解る。而して用い易いように索引其他に補訂を加えたようすが見えるのである。」（有朋堂版『国語の力』、一五三頁）（『セザウラス』へ Thesaurus へは、のち、一九一一年に、その International edition が刊行され、一〇余回も版を重ねて今日に及んでゐる。）

ついで、垣内松三先生は、「セザウラス」の索引改訂の意義を説きつつ、辞典の組織体系に関する改訂の見られなかつたことを指摘し、つぎのように述べられた。

「学習実用の目的のためには言語を検出し得る便宜を兼ね備えなければ満足することはできない。故にこの索引の完成は実用の不便を補いて大に学習の便宜を与うるものであつた。然るに元来ローゼット式辞典の特色はその組織的体系にあるのであつて、引用辞典・類語辞典と同じ形ではあるが、その性質は異つて居る。然るにその特色のある方面には補訂が進まなかつたように見える。この立場から見て我々は新語の増訂とか、部分的な更生よりも更に必要なる改訂が試みられなかつたことを遺憾とするものである。一言にしてい

えば、ローゼット式辞典の組織はその時代の自然科学的思潮及び彼の学風に基くものであつて、現代思想の立場から見ると、その組織の系列もしくは系素の中には、もつと統一しなければならぬ錯雑分類がそのまゝになつて居ることが見つかるのである。」（有朋堂版『国語の力』、一五四—一五五頁、傍線は引用者。）

このように、「セザウラス」の分類法について、批判的見解を示しつつ、垣内松三先生は、さらに具体的に、「視ること」という例をとりあげ、つぎのように説述された。

「既に、ジョン・ローゼットがいえるように、たとえば『視ること』の下に統一して語群を秩序づけようとする時に、この辞典に挙げられたる綱目を見ると紛らしく感ぜられるような分類法が見える。ジョン・ローゼットは其訂正を試みなかつたが、その疑問と改訂の希望を漏らして居る。試に前節に抄出した、『セザウラス』総目次について『視ること』に關係のある綱目を考えるならば『空間』『物質』はいうまでもなく、『抽象的關係』もその中に含められると考えられぬでもない。単に『感覺』の第三種の下にある、光・色等を挙げるだけに止まらないで、そうした見方によりて『視ること』の分野を整理した根柢から組織を改むる必要があるかも知れぬ。もし又『視ること』を『理念』の意味とする考え方も進めたとしたら、すべての言語はその根源より生れ出ずるものと考えられないでもない。その立場から、コエーンが考えたように思维の根源から分化する文化意識の三領域即ち科学的意識・道德的意識・芸術的意識の三方面を挙げて、その各方面に属する語群を統一するとしたら、『セザウラス』とは全く面目を更めた組織が可能であるとも考えられるのである。素よりその実際に於ては困難な

事業であるが、こうした組織によりて語彙が秩序だてられたとしたら、ローゼットが当初の理想が一層明白に実現せらるゝことであらう。」(有朋堂版「国語の力」、一五五—一五六)

ここには、「ローゼット辞典」の分類体系について、垣内松三先生の出場からの独自の見解が提示されている。垣内松三先生が「ローゼット辞典」からの無批判の借用を考えていられたのではなく、むしろローゼットの本来の理想をどのようにして具現しようかについて、いっそう深く見抜いていられたことを知りうるのである。

ついで、垣内松三先生は、わが国の辞典史にも眼を転じ、つぎのように述べられた。

「我が国の辞典史は各国に於ける如く分類的辞典から始まって、近代になってから、実用的・一般的・専門的語彙となり、音韻的排列は全ての形式となって居るが、古い辞書の上に現われた古人の分類的辞典を見ると、その時代の思潮に基いた分類の上に尊むべき心の痕が見つけられるのである。又、僅かではあるが『夜船集』のごとき対照辞典の計画も見える。これ等の編纂法を見るにつけて、それは言語研究者の心の中に潜める希望の一の形であると考えるのである。故に一般辞書の外に『セザウラス』のような特殊な辞典の要求せられるのも偶然ではあるまいと思う。もしこの方面に於ける整理がもっと合理的に徹底的に行われたならば、言葉の意味の理解に便宜を得るのみでなく、文化意識の哲学的研究の上にも裨益するところが少くあるまいと思う。」(有朋堂版「国語の力」、一五六—一五七)

広い視野から、分類対照辞典のありかたならびにその効用のことが考察されているのである。垣内松三先生は、前掲文章の末尾に、

(本叢書第十二卷『国語学習辞典』参照)と記し、また、第一五節の末尾にも、(本叢書第十二卷『国語学習辞典』及び英独仏語を対照した『国語対照学習辞典』『読方学習辞典』(近刊)参照)と記していられる。垣内松三先生に、ローゼット式辞典ふうの、進んだ国語学習辞典の編纂の意図のあったことは明らかである。「国語の力」を第一巻とする、「国文学習叢書」(全一二巻)のうち、第一二巻は、すなわち「国語学習辞典」だったのである。

ついで、2の問題、同意語識別のことについては、まず、「たとえば国語研究に於て、ローゼットが試みたように、同意語を並列して見ると、いろいろ複雑な疑問が起つて英語の場合のように簡単ではない。その相互間のデリケートな差異に就いていろいろな疑問が生じて来るのである。最も煩瑣に堪えないのは、文字の上で増加した、外来語の整理を要することである。」(有朋堂版「国語の力」、一五七)と述べ、ローゼット式辞典の方法を国語に適用するばあいの問題の所在については、つぎのように述べられた。

「ローゼット式辞典は、こうした智識の整理に当りて、自然にその目的が達せらるゝ形式を具えて居るといふことができる。特に同意語を一目の下に並べて見ると、いかに日本語が整理も精練もせられて居ないかということをあからさまに見せてくれるのである。現今普通に用いる漢字を約二千字と考へることができらば、これと仮名とを組合せて、三四万の言葉が表記せらるゝのであるが、その中には一語を表わすにも、いろいろの表記法が多く含まれて居る。この表記法の整理を試るならば、日本語の純真の姿が現われて来ると同時に、言語学習・文字学習の合理的基礎も現われて来る

のである。文字整理の問題もこゝから導かれ、または克服せらるべきものであろう。ローゼット式辞典の編纂に際しては、問題とされなかつたことが、その方式によって、国語を整理し分類して見ると、我が言語学習の場合には、それから示唆されて更に複雑なる問題が示されるのである。同意語の微妙な差異を知るといふよりも、もつと手前の国語の『正しい表わし方』の問題から出発せねばならぬことが明示されるのである。」(有朋堂版「国語の力」一六〇—一六二)

垣内松三先生は、「ローゼット辞典」に照らしつつ、わが国における国語整理の問題点がどこにあるのかを明らかに見すえていられた。同意語の識別という問題もさることながら、正書法の問題から出発しなければならぬことを指摘していられるのである。

つぎに、3の問題、「ローゼット式辞典」の他の国語への適用ならびにその効用については、左のように述べられた。

「ローゼットが、その辞典編纂から Polygot Lexicon (引用者注、数カ国語対照辞典) 編纂の可能を信じ、この立場から、ギリシヤ、ラテン、フランス、ドイツ語も整理されると考えて居た。又、実際に彼の辞典が現われてから、一八五九年にはロベルトソンの Dictionnaire Idicologique (パリにて刊行) 一八七九年にザンデルスの Deutscher Sprachsatz (ハイデルベルヒにて刊行) が現はれて居る。而してそのいずれも、ローゼットの翻訳であつて、それ／＼の国語に於けるこの方式の適用の可能を示して居る。もしそれ等を類聚大成したならば、ローゼットの Polygot Lexicon の理想は実現せらるゝであらう。而してローゼットは謙遜にも、『か

ような作業の上から、これに依りて人類の思想具融の考察、^{ユニバーサルラックエッジ}の建設を夢めるのは、今では一つのユートピアに類して居るが、もしそれができたら人性展開の長い連続の姿が見えるだろう。又言語相違のために惹起されて居る民族的距離の相互の調和・理解も齎らされるであらう」と考えて居るのは、強ち夢想でもないと考えられる。少なくとも我が国語の学習に於て、日本語とその表記法の不整頓から生じて居る重複・表記を整理し(文芸の作品の上に於ては早くから注意もされ実現されて居ることもあるが)更に一步を進めて、外来語を翻訳するために、一層重複する同意語を整理するために、ローゼットの考えたような Polygot Lexicon が編纂されるならば、国語の学習を基として文化民族の言語の学習が統一せられるであらう。日本語を基点として世界の言語を取得するローゼットの所謂 *Aspiration* は、亦我々の望みでもあらねばならぬ。」(有朋堂版「国語の力」、一六一—一六二)

ここでは、ローゼットの夢想に託して、垣内松三先生みずからの国語の整理・国語の学習への夢が語られているのである。ローゼット辞典の持ちうる可能性について、垣内松三先生は数々の見通しと望みとを持っていられたようである。

さて、垣内松三先生は、以上の考察をまとめて、つぎのように述べられた。

「具体的例証としてローゼット式辞典を批評することから、同意語の識別の問題に深入りしたが、茲にいおうと思ふことは、素より辞典編纂法の問題ではない。文の中に示されて居る言語の上に、作者がいおうと思つたことを、どこまで精しく正しく美しく、いい現

わし得たかを見ること为主题であつて、それを注意すると同時に、そこから生ずるいろ／＼の疑問を明白に整理しなければならぬ要求が生まれて来る。語彙の豊富にされることや、言語の知識を取得することはその自然の結果である。

その一着手は、求むる言語の意味を辞典の上に見出すことであつて、文の上に於ける適切なる解釈を求むるためには、それ等の同意語の微妙なる差異を識別する力を常に精練せねばならぬ。」(有朋堂版「国語の力」、一六二—一六三ペ)

垣内松三先生が「ローゼット式辞典」の考察を通して、なにを目標としていられたかが、明らかにされている。国語学習において、同意語の微妙なる差異を識別する力を、どのように精練していくかが中心課題となつていたのである。

垣内松三先生自身は、「セザウラス」(ローゼット式辞典)の一八七九年版を入手して、考察の対象とされた。「国語の力」が執筆された当時は、すでに、Rogets' International Thesaurus の一九一一年、一九二二年の版が出ていたはずであるが、これについては言及されていない。

さて、垣内松三先生は、前掲のような「ローゼット式辞典」の考察にはいるにさき立ち、第九節「同音語・同意語」の中で、つぎのように述べられた。同意語の識別・学習について、どこに問題があるかを、具体例を掲げながら説かれていたのである。

「今日、新聞で見たある学校の解釈力の入学試験法として、たとえば『山』という文字から、考えられるだけの觀念の答えを求む、というような場合に辞書的・解釈的・譜記的・器械的な学習法に慣

れた学生であるとしたら、同音語の側からものゝ山と積まれて堆く^たなつた山、山師のやま、もう少し専門的に比叡山を示すやま、祭祀の鋒のやまを聯想し、又文字の上から岳・嶽・峯・崖等の山に因める又は山を冠むる文字を聯想するかも知れぬ。併しもし同意語の聯想を求むるのであつたら、抽象的に、高さ、高度、向上、卓越、高調、高尚、尊貴、傲慢、崇高等や具体的に巨軀、塔、記念碑、殿堂、櫓、穹窿等を憶い出すことは今の学生にとりては随分困難であらう。試験が何を要求するかは私の知るところでないが、少くとも『高』という概念の下に統率されて、自然・人生・抽象・具象のいろ／＼の名詞を憶い出すというような自由な言語の学び方は経験しなかつたのである。況んやそれ等の類似した言語の間の差異を見分けることも注意されて居ないのである。辞書は、知らない文字言語を明にするように画引又は五十音順に編纂した事典又は語彙である。故にその中から求むる文字又は言語と、類似した文字又は言語を、(譜記的器械的に取得するのではなく)ある合理的な理解の下に統率して自己の文字語彙を豊富にするというようなことはむづかしいのである。それであるから、外国語の学習はそれと全く離れた注意を要する困難な作業であつて、国語を中心として、その中に外国語を取得することのできなないほどの距離のある学課となつて居る。同意味をここまで拡張して考えることができるならば、国語学習の現状に於ては、そうした学習上の便宜は少しも考えられて居ないといつてもよからう。それであるから形式語『だに』『さへ』『すら』『のみ』『ばかり』等の区別は心得て居ても、他の品詞の区分は、古語の外は、品詞論的区別を知るのみで、その意味に於て区別して考えることができぬ。この欠点^{てん}が、文の上に現われたる言語の活力を

明かに意識する上に、いかに支障を来たして居るかも知れないのである。」(有朋堂版「国語の力」、一四四—一四六)

右は、「国語の力」執筆の途上であつて、たまたま目撃された「今日」の新聞紙上の試験問題の一つに例をとつて、在来の国語学習における同意語などの扱いの欠陥を指摘しており、もっとも鋭い国語学習批判となつてゐる。具体例は、執筆時に目にした新聞から採られているが、そこに述べられている同意語の学習論は、決して単なる思いつきに出ているものではない。本格的な清新な国語学習観が開陳されているのである。

垣内松三先生は、また、前出「ローゼット式辞典の考察(二)」(第一四節)にも、新聞に見られたある入学試験の答案を例として、その考察を展開された。

「たとへばさる学校の入学試験の答案に、『管見』を『菅原道真の梅見に行つたこと』と答えたり『道破』を『道徳を破ること』と答えたのがあつたと新聞に記してあるが、これは一場の笑い話として見過すことのできない国語学習の現状を示すものと考えられぬでもない。又これを以て国語の学力が乏しいというような判決の資料とすることに就いても、直ぐさま服従することができるのであろうか。前のような答え方は、常に行われて居る『いい換え』の最も拙な無理性な悪用であつて、遺憾に堪えないのであるが、もしこれを笑うならば、同じ性質を帯びているいい換への習慣を自嘲しなればならぬであらう。併しながらそれは些末なことである。それよりも国語を学ぶ時に、国語解釈ということは何時でもある一定の型があるように考へて居り、明敏なる理性が躍動する他の学課とは異つた、特別な考へ方を要するもののように習慣づけられて居るか

ら、研究的良心を欺瞞して自ら安んじ得ない答案を記したり、自己の放縱な恣意を内省する機会がないまでに理性を腐爛させるような学風のあることがなさげなく思われるのである。この間に答え得たとしても、それは幸にして、嘗つてこの言語を見る機会があつたので、その記憶を再現したというに過ぎないものであつて、不幸にしてその機会がなかつた学生に比して、国語の学力の優劣が定められるものでもなければ今の学生の国語の力が乏しいと判断し得らるゝものでもない。

もしこれくらいいふ言語の意味は、ともかく心得て居る筈であるといふのならば、私には別に尋ねて見たいことがある。それはこれまで日本語の研究に於て、たとへば『見る』とか『いふ』とかいふ動詞と関連した重要な言語が、一目の下に類聚され、統一され、対照されて、その差異、純不純、転来転訛等に就いて考へたり、学んだりする準備や実習の機会が与えられて居たかどうかということである。それは多分極めて稀なことであらうと思われる。そうしたら言語を学習するには心を辞書のようにするまでに単語を一々に暗記して置くより外に途はない。他の学課のように、統一組織的に一の体系を形造つた学力を鍛錬する機会はなかつたのである。而してこうした不合理な学習態度の中から、見るに堪えない答えが生れたとてそれが何の不思議なことであらうか。そうした答を笑うより、却つてそうした答を生ぜしむる精神の根柢に於ける、思惟の混乱、理性の昏睡を見ることから、決してそれを嘲笑し得る筈はない。もし真摯に人の心の動き方を考へる人であつたら、そうした答を憫笑していさゝかの智識の優越に誇つたり媚びたりすることはできないであらう。」(有朋堂版「国語の力」、一五七—一六〇)

ここには、当時の「いい換え」主義に立つ国語学習の現状が痛烈に批判されている。国語学習の真相が見据えられ、皮相な言語学習が見破られているのである。「国語の力」において、垣内松三先生の国語学習観が端的にあらわれているのは、むしろこうした問題探求がなされている箇所である。在来の国語学習(言語学習)の実態が鋭くえぐられているのである。

垣内松三先生は、言語の内面的研究に深い関心を示された。また、言語の活力の発見と把握について、もっとも意欲的であった。「ローゼット式辞典」と垣内松三先生との出会いには、意義深いものが認められる。その方式に共鳴しつつ、垣内松三先生は、それを冷静に批判し、その克服のうえに、新しい国語学習辞典が構想されようとしていた。「ローゼット式辞典」を媒介にして、垣内松三先生は言語学習とりわけ同意語の識別とその学習のありかたについて、考察を深められた。その考え方には、明らかに近代国語教育観の成立が見られる。「ローゼット式辞典」の存在は、「国語の力」の核心部分の成立に大きくかかわっていたといえるであろう。(昭和46年5月11日稿)

(本学教授)